

## 第3章 もっと便利に使うために (情報の活用方法)

第2章の解説に沿って実際に利用してみて、「簡単に EDI はできるんだな」という感想を持たれた方が多いのではないかと思います。

今までは EDI と聞きますと、これはシステム担当者の話で自分には関係ないと思われていたのではないのでしょうか？

第2章で実際に経験された方は、もう EDI を戦略的に利用する BPR 推進担当者へと一歩近づきました。

さて、EDI というのは単なるデータを交換するツールです。このツールをさらに自分の業務に近づけるための一工夫でさらに便利に利用することが可能となります。

本章では、そのヒントをご提案します。実際にご自分で作ることもできますし、それが困難であれば、この章を身近にいるシステム担当者やシステムベンダーに見せて話を進めれば、対応してくれるはずです。

### 3 - 1 市販ソフトウェア・パッケージを活用

EDI でデータ交換した情報を、自分の業務で活用する際に、市販の表計算ソフトウェアやデータベース・ソフトウェアを利用することをお勧めします。

まずは、大規模なシステム開発をするのではなく、パソコンを利用し業務改善を実施し、その効果を確認した方がよいと思います。

経済産業省産業構造審議会繊維産業分科会(平成 15 年 7 月)「日本の繊維産業が進むべき方向ととるべき政策」(新繊維ビジョン)でも、以下のような報告が行われています。

#### 「これまでの問題点

イ) 各企業のシステムの開発・構築に当たり、システム・ベンダーへの依存が大きかったこともあり、目的達成のために必要最小限のシステムとならず、不要な機能が付き、コストが高いものとなったばかりでなく、オペレーションが複雑で使いにくいものとなったケースが多い。さらに、汎用ソフトと言っても、実際に使用する場合には、多くの手直しが必要だった。

ウ) 各企業のシステムの相互運用性(インターオペラビリティ)に欠けている。」

(P. 26 7. SCM化・IT化に関する詳論等 (1) SCM化・IT化の現状と方向)

「ウ) また、SPA事業において行われている、川中の製造事業者等との小売情報等のリアルタイムな共有と、商品の企画・開発、生産、販売の一体的なマネージメントを普及することが必要である。このため、国は比較的安価なシステム投資等の費用で情報共有や企画・開発、生産、販売の一体的なマネージメントを実現するモデル事例の形成を支援し、これらのモデルを用いて川中中小企業等に普及していく。」(P. 19 5. 国の役割 (1) 構造改革の推進)

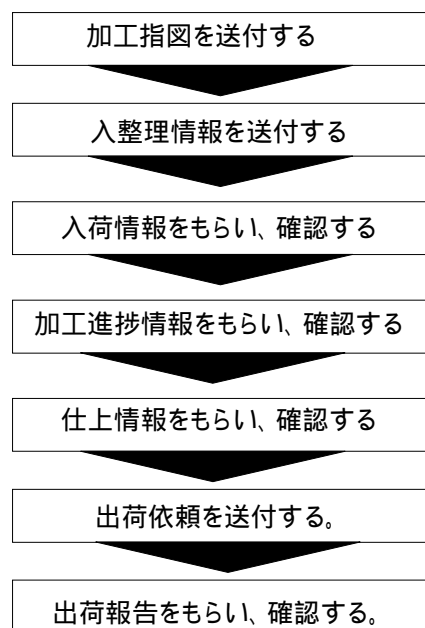
この報告にあるように、様々なシステム・ベンダーの高価な「汎用」ソフトウェアを購入したり、開発するのではなく、安価で広く利用されている市販ソフトウェア・パッケージを利用して、自社のシステム開発を行うことが、これからIT導入を検討している企業にとっては、賢明な対応であると言えます。

### 3-2 データベース・ソフトウェアを利用した進捗管理

第2章の説明でお分かりのとおり、簡易EDIで実現されているのは、CSV形式データを相手(パソコンかホストコンピュータ)に送り届けたり、受信したりするだけです。

あなたがテキスタイル企業の方であれば、次のような流れを一つひとつの加工指図ごとに意識していると思います。

つまり



これらの一連の流れを、加工指図毎に情報を整理し、今どのような状態にあるのかを、一目瞭然に確認でき、お客様であるアパレル企業に対して約束している納期を守るよう、アクションが必要ならすぐさま対応できるようにしたいと思われるのではないかと思います。

しかし、簡易 EDI だけではそこまでの処理はできません。EDI とは、あくまでデータ交換の仕組みですから、データをどう加工していくかはその利用者に任されるのです。

尾州テキスタイルネットワークの業務フローでは、様々なメッセージのやり取りを、例えば「加工指図番号」や「テキスタイル品番」で、メッセージを整理して、進捗状況を把握するということになると思います。このシステムはどうやって構築すればいいのでしょうか。

今、ご利用になっているパソコンに、Microsoft 社の Access というデータベース・ソフトウェアが入っていませんか？(インストールされていませんか？)

または、他のデータベース・ソフトウェアでも問題ないです。このデータベース・ソフトウェアを利用して、進捗管理を行うプログラムを作れば、きっと役に立つことと思います。

下の図は、他の企業がEDIによって、データが送られてくる場合の処理イメージ図になります。

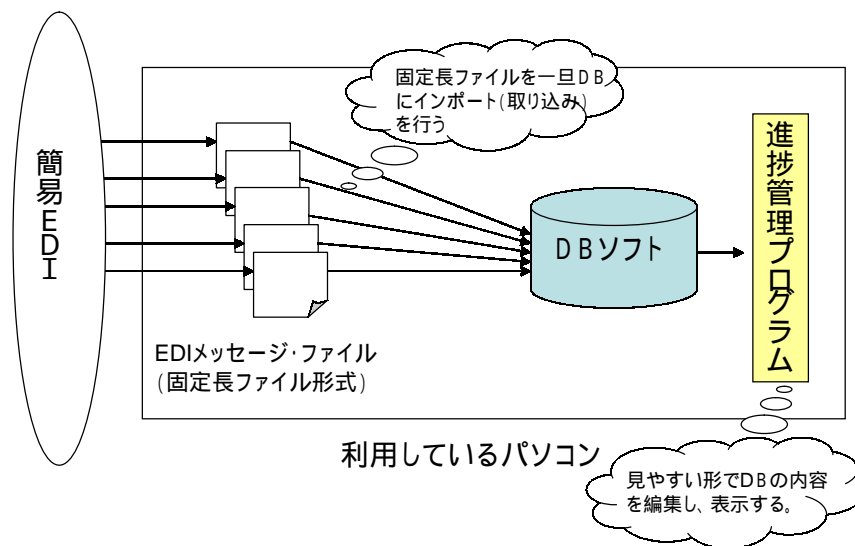
簡易EDIにより、相手企業からのデータを受信する。(この時受信するファイルは、固定長ファイル形式になっています)

固定長ファイルを、データベースにインポート(取り込み)します。

利用者はデータベース・ソフトウェアにより編集し、見やすい形で表示します。

送信の場合は、その逆の流れになります。データベース・ソフトウェアを利用すれば、第2章で実習されたように Excel シートを全て入力する必要がなく、受信した情報を利用しながら必要な個所だけ入力して、EDIメッセージを自動生成することも可能となります。

ぜひとも、あなたの会社に合った仕組みを考えて、構築してみたいと思います。より仕事が正確に、速く進むと思います。



外部からEDIで送付されてくるデータを処理する場合

### 3-3 販売管理ソフトウェアとの連携方法

いろいろと便利な簡易 EDI の応用についてご紹介してきました。さらに身近なものにしていくために、パソコンの販売管理ソフトウェアとの連携について、最後にご紹介します。

ほとんどの企業では、パソコンなのかホストコンピュータなのかは別として、何らかの販売管理ソフトウェアを利用していると思います。

販売管理ソフトウェアでは、売上の管理や納品書・請求書・物流会社への送り状等の帳票作成などの処理を行っています。

この販売管理ソフトウェアや帳票作成ソフトウェア自体は非常に便利なソフトウェアですが、この入力業務の流れは、一般的には社内で一旦紙に出力したり、メモに下書きして、このソフトウェアの画面に向かって入力するといった作業を行っているのではないかと思います。

例えば、テキスタイル企業では、染色・整理会社から出荷報告の情報を簡易 EDI で入手すると、この出荷報告データをメモ書きしたり、印刷したりしたものを見ながら、販売管理ソフトウェアに入力しています。

しかしよく考えてみると、せっかくデータで入手した出荷報告なのに、一旦紙にして、また再入力するというのは大変非効率な作業です。

できるなら、簡易 EDI の出荷報告データをそのまま、販売管理ソフトウェアに取り込みたいと思われているのではないのでしょうか。

一般的に、パソコンの販売管理ソフトウェアは、データのインポート(取り込み)機能を持っていますので、この機能を有効利用しましょう。

簡易 EDI で受信したデータを、インポートできる形式に変換するプログラムを作成するだけで、効率的な運用が可能となります。

次頁にそのイメージ図を示します。ぜひ、ご検討ください。

既に、ある繊維産地の企業は、開発を行い、利用しています。

